

はじめに

本書は、都留文科大学文学部社会学科 2004 年度「社会調査・地域調査 A」および同「社会調査・地域調査 B」による調査実習の成果をまとめた調査報告書である。「社会調査・地域調査」は、同学科 1 年生必修の社会調査実習科目である。2004 年度の両クラスによる調査活動では、都留文科大学の所在地である山梨県都留市を調査対象地域に取り上げ、「都留に暮らし、キャンパスライフを送るということ」の調査テーマのもとに、前期（4～9 月）に、都留の地域社会の諸相をめぐってその概括的な基本特性を理解しようと、文献調査およびフィールド観察や市内主要団体・機関・地域住民へのインタビュー・聞き取りなど、おもに質的方法による調査を実施した（第 1 部）。さらに後期（10～3 月）には、前期調査による知見を手がかりに、都留文科大学に在学中の大学生を調査対象者とする学内調査票調査「文大生の学生生活と意識に関する調査」を実施した（第 2 部）。本報告書は、これら 2 つの調査成果によって構成される。

調査テーマ策定の経緯

都留文科大学は都留市立の公立大学であり、人口 3 万 5 千人のまちがかかえる唯一の大学として地域密着型の存立基盤をもっているが、教員養成の伝統を誇ることもあって、そこに通う学生は、本報告書第 16 章でもふれるように全国各地の出身者によって構成されている。市内や近隣市町村の出身者はきわめて少数で、8 割以上の学生（以下、「文大」「文大生」と略称する）が下宿生活を送っている。その下宿先は、ほぼ例外なく大学周辺を中心とする都留市内である。「社会調査・地域調査」の A クラス・B クラスに集まった計 74 名は、このように、山梨県内をはじめ、文字どおり「北は北海道から南は沖縄まで」の全国からやって来てこの地に通り、あるいは暮らし始めたばかりの学生たちであった。「都留ってどんなところ？」「大学生活ってどんな感じ？」…、そういった好奇心はおそらく全員に共通のものであらうと思われた。その彼ら／彼女らにとって、これから 4 年間で過ごすことになる都留の地域社会について、そしてまた文大生の学生生活と生活意識について実証的な理解を深めることは、意義深い課題であらう。それはまた、「教員、学生いっしょになって地域を考え、地域で行動する、そうしたことを支える仕掛けをつくる」という本学社会学科の教育課題にも合致するところであらうと考えた。このような判断から、開講にあたって「都留に暮らし、キャンパスライフを送るということ」の調査テーマを提案した。

大学所在地を取り上げることにはもうひとつのねらいがあった。大学での 4 年間は、とりわけ社会学科に所属する受講者たちにとって、「社会」について学び、また、「市民」としてそれに交わるための流儀を身につける期間でもある。ともすれば、親しい「仲間」以外との接触やコミュニケーションが不得手で、若者の、「社会」に対するリアリティ感覚が希薄化していると指摘されることの多い昨今の風潮のなかで、朝夕見慣れた「風景」的空間を、もっとも身近なところにある「社会」と捉え直し、地域社会と地域住民のなかに飛び込んで、そのありようを社会調査の手法によって実証的に理解していくことは、受講生たちにとって貴重な学習機会となるだろうと思われた。

研究射程

都留市を調査対象地として選定するに当たって先行研究や基礎情報の予備的探索を試みた。その結果、学外の研究機関・団体・個人による文献に関しては、市史や郷土史研究、地域経済研究などの分

野において一定の蓄積がみられるものの、社会的な問題関心による地域社会研究の成果は、管見の限りでは、限られた数に過ぎなかった。都留文科大学の教育研究活動は、伝統的に、都留の地域社会との密接なつながりのもとに展開されてきたという特色をもっている。社会学科に限らず、フィールドワークや学外実習を行うカリキュラムの数は多く、学内には「都留文科大学地域社会学会」という学会組織もおかれている。「社会調査・地域調査」の科目にしても、1年生の必修授業としてこれまで長年にわたる実績をもっている。しかし、それら学内の研究成果がまとめられた公刊文献・資料となると、膨大な質・量におよぶと想像される過去の研究活動や調査実施の蓄積に比べれば、意外にも、それに見合うだけの点数ではなかった。紀要や学内学会誌の一部を除けば、過去の調査報告書の類を含め、社会的な地域調査の先行データや先行知見に関してわれわれが一般に閲覧できるものとしては、限られた数にとどまった。この事情は、文大生の学生生活やその社会意識を対象とする調査研究に関しても同様であった。このような経緯から、本調査では、都留の地域社会および文大生の生活実態について、特定のテーマを絞るのではなくて、その諸相全般にわたって網羅的概括的な基礎理解を得ることに目標を据えたい。結果的に、この調査課題は、ほぼ全員が1年生である受講者たちの私的関心に沿うものでもあろうと想像する。

活動経緯

社会調査をアクチュアルに学び、実践的な調査スキルを習得するためには、それに参加する調査メンバー自身が、問題関心と問いを定式化することにはじまって、調査の構想・企画から報告書作成までの一連の過程に主体的担い手として参加することが重要である。調査活動の遂行にはバイタリティーとタフさが要求されるが、その動機付けとなるものは、何よりも調査者自身の問題関心であるし、その関心の所在こそが、調査プロセスの各段階における調査の基本設計や方法の検討に際して基盤をなす。そういった体験機会を受講者に提供するため、授業担当者としては、調査メンバーに対して調査対象地域と調査テーマ（「都留に暮らし、キャンパスライフを送るということ」）を提案した以外、具体的な調査計画を「お膳立て」することはしなかった。「都留とはどんなまちか、文大生はそこでどのような学生生活を送っているのか、それらの見取り図を描いて、それを実家の家族に伝え全国の潜在的読書に向けて情報発信するつもりで報告書にまとめよう」…、ただその一点を唱導することだけをもって調査活動は始まった。

4月から6月にかけて、まずは文献調査と市内フィールド観察ツアーなどの活動を通じて基礎的な情報を集めた。そのプロセスで各自があたためた関心をつきあわせ、関連するものどうしを結びカテゴリー化することによって具体的な調査テーマがいくつか浮かび上がってきた。それらのなかから各自が自分の関心に即して主体的に選択することによって、以下に示す計12の調査班が編成された（頭文字のアルファベットはクラス名を示す）。

「A 地域概況班」「A 歴史班」「A 自然と観光班」「A まちなみ班」「A 教育・福祉班」「A 交通班」

「B 地域概況班」「B 歴史班」「B 自然・観光班」「B 産業班」「B 祭りと伝統行事班」「B 人・夢・子ども班」 （このほか、のちに両クラス有志による「生出神社調査特別班」も追加編成された）

こうして、7月以降、各調査班単位での調査活動が展開されていった。具体的な調査計画の策定、調査対象者への依頼状の作成とアポイント取り、調査の準備と実施、対象者への礼状投函、調査結果のまとめなど、これらはすべて各調査班メンバーの手によって進められた。10月になって後期活動が始まると、今度は、学内調査票調査の実施に向けて準備に入った。前期の各班調査によって得られた知見をもとに、それに関連付けた内容を中心とする設問案を班ごとに作成し、それを持ち寄ってクラス

全員で協議・検討を行った。こうして「文大生の学生生活と意識に関する調査」の調査票ができあがった。調査票の配布と回収は21の授業を対象に授業終了後の教室内で行われたが、その一連の作業もまた受講者全員による分担によって行われた。もちろん、データの入力から集計・分析、レポートの作成に至るまでの作業も全員参加のもとに行われた。

おもな活動記録

4月

- 社会学および社会調査法に関する基礎講義

5月

- パソコンの基本操作に関するインストラクション
- 調査手順のインストラクション
- 情報リソースの利用方法に関するインストラクション
- 先行研究情報の収集

6月

- 年間基本構想と作業計画の打合せ
- メーリング・リストの構築
- 作業プロジェクト・チームの編成
- レポート「My First Impressions」（受講者各自の都留のまちに対する第一印象）提出
- レポート「A Day in University-T」（文大の学生生活を象徴するシーンについてのフォト・プレゼンテーション。フィールド観察の学内練習）提出およびプレゼン
- 第1回フィールド観察（市街中心部訪問）（6月24日）



7月

- 受講者各自の問題関心のリストアップとカテゴリー化作業
- 調査テーマ案の検討（ブレイン・ストーミング作業）
- 調査テーマとサブ・テーマの決定
- 調査班編成
- 第2回フィールド観察（リニア見学センター、尾県郷土資料館、宝の山ふれあいの里、芭蕉月待ちの湯訪問）（7月10日）



- 各班調査計画書の作成
- 調査企画の検討
- 先行研究および基礎資料の収集
- 収集資料・文献の読み込み作業

8月～9月

- 大学図書館、市立図書館などでの文献調査
- 市役所など関係機関への各班訪問と資料収集
- 各班によるフィールド観察
- 「都留市・道志村合併協議 第1回住民説明会」取材（A 地域概況班）
- 市役所観光産業課での聞き取り調査（8月18日）
- 「八朔祭り」練習・準備活動取材（8月18日～30日）
- 「八朔祭り」取材・フィールド観察（B「祭りと伝統行事」班・AB歴史班ほか。8月31日～9月1日）
- 「八朔祭り」大名行列に参加出演、参与観察調査（B八朔祭り大名行列取材班。9月1日）



- 市街地「まち歩き」調査・フィールド観察（A「まち並み・水」班。9月3日）
- 市役所水道課での聞き取り調査（B地域概況班。8月3日・9月17日）
- 「ミュージアム都留」見学（AB歴史班。9月17日）
- 郷土史研究家への聞き取り調査（AB歴史班。9月28日）
- 佐伯橋水道施設見学（B地域概況班。9月29日）
- 「水掛菜栽培農家と歩く都留の湧き水探検」調査（A「まち並み・水」班。9月29日）
- 美富士農業協同組合での聞き取り調査（A産業班。9月29日）

10月

- 後期授業再開、後期活動の打合せ（10月7日）
- 市役所総務課防災行政無線担当者への聞き取り調査（A「自然と観光」班）
- 「宝の山ふれあいセンター」訪問・インタビュー調査（A「自然と観光」班。10月12日）
- 鹿留溪流フィールド観察・「FISH ON! 鹿留」インタビュー調査（B「自然と観光」班。10月16日）
- 新駅開業にともなう富士急行線乗降客数変動調査（A交通班。10月22日～12月3日）
- 東桂小学校での聞き取り調査（A教育・福祉班教育グループ。10月26日）
- 郷土史研究家への聞き取り調査（B「祭りと伝統行事」班。10月29日）
- 調査票作成作業についてのインストラクション

11月

- 「いきいきプラザ」市福祉事務所での聞き取り調査（A教育・福祉班福祉グループ。11月1日）
- 市教育委員会学校教育課へのインタビュー調査（A教育・福祉班教育グループ。11月2日）

- 市役所産業観光課での聞き取り調査（A「自然と観光」班。11月5日）
- 谷村第二小学校日曜参観（総合的な学習の時間）の参与観察調査・インタビュー調査（A教育・福祉班教育グループ。11月7日）
- 「生出神社」参拝・フィールド観察（B生出神社調査特別班ほか。11月14日・12月12日）
- 調査票調査の方法に関するインストラクション
- 調査票作成作業

12月

- 学内調査票調査実施手順の打合せ



- 学内調査票調査「文大生の学生生活と意識に関する調査」実施（12月8日～17日）
- 学内調査票調査「少子化・晩婚化に関する文大生の意識調査」実施（A教育・福祉班。12月13日～17日）
- 東桂小学校アンケート調査「都留市の小学校における『総合的な学習の時間』に関する調査」実施（A教育・福祉班教育グループ。12月13日～1月15日）
- 社会統計学に関する基礎講義

1月

- 学内調査票調査の集計作業
- 生出神社関係者への聞き取り調査（B生出神社調査特別班。1月29日）

2月

- 統計データの集計・分析作業に関する補講
- 都留第二中学校調査票調査「都留市内中学生の生活意識と街イメージに関する調査」実施（B人・夢・子ども班。2月22日）

3月

- 調査報告書の作成作業

授業担当者としての溺愛に過ぎぬかもしれないが、受講者たちの取り組みはじつに精力的であったと思う。人影もまばらな休暇期間中のキャンパスで、メンバーたちが調査班のミーティングやデータ分析作業に打ち込む光景は感動的でさえあった。10月の後期再開を迎えた時点で、自分たちが立てた調査計画の予定を消化できていない班もあったが、それをうやむやのうちに途中で放棄してしまうことはなかった。それどころか、後期のクラス全体による調査活動との2本立てで、むしろ本格的な規模の調査を実施する調査班が続出し、そのなかからは貴重なデータとして価値の高い成果につながったものもある。週に1回90分限りの授業時間という制約のもとで、詳細な打合せや連絡の多くは共有フォルダ機能をもつメーリング・リストを活用して行われたが、1年間に飛び交ったメールの数は750件以上にのぼった。

結語

本調査の実施とその成果は、いわば、終始一貫して受講者たちの手作りによるものといえるだろう。本報告書に記された知見と見解もまた、受講者たちの手によるものである。都留の地域社会および文大生の学生生活の諸相に対し、そのなかから何を焦点化し、それをどのように分節化したかは、直接的には調査メンバーたちの関心の所在と思考を反映するものであり、明らかな誤認がある場合を除いて授業担当者がそれに手を加えることは差し控えた。社会調査の成果としては熟考に欠ける点や社会的構想力に乏しい点も多々ある。しかし、本報告書各章の記述を、「文大生（しかもその大半は 1 年生）の目が捉えた都留の地域社会と文大生の生活」という観点に立って読み解くならば、少なくともそこには一定の価値が認められるだろう。

2004 年 11 月 16 日に富士急行線の「都留文科大学前」駅が開業したが、奇しくも、本調査はそれに立ち会うこととなった。開講時、畑のなかに線路が通るだけであった場所に新しい駅ができ、駅に通じる道路がひかれ、周辺の畑は真新しい土地区画に整備された。後期調査のとりまとめに着手する頃には、そこに市内で最大規模の総合スーパーがオープンし、それ以外のあちこちにも建設されたばかりの商業施設の建物が目を引くようになった。われわれ調査メンバーは、土地開発計画によって都留市の新たな拠点が具体的なかたちとなって現れてくる瞬間の目撃者となったのである。都留のこれからの長い歴史にとって、おそらくこの風景の変化はエポック・メイキングなできごととなるだろう。まさにその年に、ほかならぬ文大生が行った調査として、本報告書にはまた、いささかなりともたんなる授業の成果物として以上の意義が認められるであろう、そう信じたい。

謝辞

本文中の調査対象者の氏名は原則として仮名表記に従ったが、本人の承諾が得られた場合に限りては実名表記とした。

本調査の活動と成果はたくさんの方々のご理解とご協力に支えられています。直接的なかたちで調査にご協力くださった地域住民の方々、関係機関の皆様には、お忙しいなか貴重なお時間を割いてくださり、学生の拙い、ときには無礼な質問にお答えいただき、また後日には、インタビュー記録の草稿に目を通し、報告書への掲載にお許しをいただきましたことに深く感謝致しております。谷村第二小学校、東桂小学校、都留第二中学校の先生方、児童・生徒の皆様、ご父母の皆様にはアンケート調査および観察調査の実施に当たり全面的にご協力をいただきました。われわれ学生を温かく迎えてくださったことに感銘を受けております。感謝の念に堪えません。また、学内調査票調査に協力してくださった本学の先生方、学生の皆さんにも謝意を述べさせていただきます。本報告書の刊行がこれほどまでに遅れた責は、ひとえに授業担当者である私にあります。多くの方に多大なご迷惑をおかけしてしまったことを深くお詫び申し上げます。

プライバシー遵守の観点から個々にお名前を挙げることは差し控えさせていただきますが、調査にご協力くださったすべての皆様に、この場を借りて心から御礼申し上げます。

2006 年 4 月 10 日

授業担当者 都留文科大学文学部社会学科非常勤講師 榎本 環